既に其の人民がトルコ種であつたことを認むる以上は、其の國人で支那に來て佛教の宣傳、佛典の傳譯に從事した僧侶のあつたことから推して、康居といふトルコ族の間には、遲くも後漢時代に佛教が行はれて居つたものであらうと見るのは、一應至當の見解と云ひ得るであらう。併しながら曾て白鳥博士の論じられたやうに、①康居の民は遊牧を業とする勇悍の民族であつて、かゝる民族の間より商人僧侶を出すことは疑はしく、或は此等の僧侶は康國の人であつたのを、南北朝時代からは康居と康國とを同一視して居るから、此の時代に出來た此等の高僧傳以下の書には、遂に之を康居の人と書くに至つたのではないかとも疑つて見なければならぬ。こゝには此の問題に深く入ることを避ける。

トルコ族として一大飛躍の時期を史上に劃するに至つたのは、漢史に謂ふ所の突厥の興起である。此の部族と佛教との關係は史籍の上に記されて居る所から見ると、極めて緣故の薄いものゝやうである。

突厥は其の興起の初頃から既に東西の兩部に分けて見ることが出來るが、その東部のもの卽ち漢史に東突厥といふものについては、隋書突厥傳に次の記事がある。卽ちその佗鉢可汗に關する記事の中に「齊有沙門惠琳、被掠入突厥中、因謂佗鉢曰、齊國富强者、爲有佛法耳、遂說以因緣果報之事、佗鉢聞而信之、建一伽藍、遣使聘齊氏、求淨名涅槃華嚴等經幷誦律、佗鉢亦躬齊戒、遶塔行道、恨不生內地」と見える。此の可汗は西紀五七三年頃から十年間在位したのであるから、此の時代に於て支那の佛教が其の部に傳へられたことは疑無いが、然も之が其の後如何なる發達を遂げたかは全く不明であつて、恐らく一時的の現象に過ぎなかつたらうと思ふ。當時支那は周齊の分爭